
雨

雨野 紫

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨

【Nコード】

N1588F

【作者名】

雨野 紫

【あらすじ】

雨に打たれながら、これまでのことを振り返る。

雨

目の前には、山のように積まれた仲間たち。

今日、私もそのひとつとなった。

雨が降っている。

ここに来るまで、私はどこかの工房のようなところにて、雨というものがあるのは知っていたが、

それに触れたことなどなかったし見たこともなかった。

雨は、思っていたよりも冷たい。

こんなにも冷たく感じるのは、なぜだろうか。

仰向けで放置された私の、眼球のない左目の窪みに、ナイフのような冷たい雨が突き刺さってくる。

そこに溜まった雨は、いつ溢れてもおかしくはない。

私は、眼球のある右目で鉛色の空を見つめ、今までを振り返る。

私は生まれたときから口もきけず、手足すら自分では動かせなかった。

目に関しても、この眼を入れてもらうまでは何も見えず、できる事といえば、音を聞くことだけだった。

そんな私にも丹念に世話をしてくれる人がいた。

彼は毎日、扱いが難しそうな道具で、私の体が滑らかに動くように悪戦苦闘していた。

それでも、そのときの彼の顔は本当に幸せそうで、それを見て、私もうれしくなった。

作業中はほとんど無言だが、時折、私の知らない世界の話をしてくれることがあって、

雨のことを知ったのはそのときだ。

彼の話聞くうちに、期待で胸がいっぱいになった私は、早くその世界を見てみたくてたまらなかった。

いつのまにか、雨は止んでいた。

彼はある日突然倒れ、動かなくなった。

私と同じようになったただけなのに、それがひどく嫌なことに感じられた。

けれども、瞼のない私は、目を閉じることさえできなかった。

それから少しして、誰かが尋ねてきて彼を発見した。

私は、その後に来た人達に運ばれて、この場所にいる。

彼は今どうしているのだろうか。

もう彼の話は聞けないのだろうか。

彼の幸せそうだった顔は、これからは見る事ができないのだろうか。

人形の私には、永遠にわからない。

空は蒼く澄んでいる。

人形の左頬には、もう止んだはずの雨が、一筋流れていた。

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。初めての投稿で内心不安だらけです。どのあたりから人形の話だと気がつきましたか？人形も人間と同じように心があるということが伝わればいいのですが……。率直な意見・感想等お待ちしておりますので、お暇なときにでも書いていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1588f/>

雨

2010年11月3日02時58分発行